

〈翻訳〉

## レヴィ＝ブリュル『原始心性』「序」と「緒論」

南 徳鉉 訳

### はじめに

ここに提示するのは、レヴィ＝ブリュル (Lucien Lévy-Bruhl): *La mentalité primitive* (『原始心性』) 第4版 (1925年第1刷)(Félix Alcan: Paris) の序 (“Avant-propos”) と緒論 (“Introduction”) の日本語訳である。

レヴィ＝ブリュル (1857-1939) はフランスの哲学者・社会人類学者である。彼の社会人類学的な貢献としては、文明社会と原始社会を隔てる、人類の心性の二つの類型について研究したことが知られている。具体的には、原始社会における思考と行動を特徴づけるものとして、文明社会に特徴的な科学的な論理的な心性と対比される、「融即律」(loi de participation)<sup>1</sup> に依拠した「前論理的」(prélogique) かつ「神秘的」(mystique) な「原始心性」(mentalité primitive) が存在することを提唱し、その分析と考察を深めた。その出発点となった彼の著作は1910年に出された『未開社会の思惟』<sup>2</sup> であり、そこでは、多くの融即の例説を通じて、上に述べた原始心性の性質について力説している。原始心性について「因果」(causalité)、「原因」(cause) の観点から分析した『原始心性』は今回訳した「序」でも触れられているように、その内容を受け継ぐものである。とは言え、『思惟』の延長線上に『原始心性』が離れて置かれ

---

1 「融即」(*participation* の山田吉彦による訳) は、手短に言えば「『原始』心性特有の」「表象の繋ぎ合わせ方及び既成連繋」のことであり、「融即律」はそれを「支配している原理」のことである (山田 1953: 94)。

2 Lévy-Bruhl (1910); [日本語訳] 山田 (1953)。

ているわけではなく、二作は様々な共通の大きな対象について異なる側面から論じているものであるので、『原始心性』を先に読んでも支障はないものと思われる。二作のより詳しい関係については、今回の「序」に述べられている通りである。

当時の時代背景を考慮すると、レヴィ＝ブリュルの人類的アプローチには画期的なものがあった<sup>3</sup>。彼は、「原始」などという言い方はすれども<sup>4</sup>、彼が対比させる原始心性と論理的心性という二つの類型について、それらが人類の心性の普遍的な発達経路の異なる段階にあるというようなことを、考えていたわけではなかった。これは19世紀後半の人類学において盛んに行われた、ダーウィンによる進化論を社会形態、宗教、法律、言語を含む文化の諸々の側面に適用し、それらの西洋文明における典型的な姿を観察される人間の文化の中で最も進んでいる段階として軸に据え、西洋文明を頂点とした杓子定規で諸文化の発展度を測ろうとした態度に相反するものである。そのような態度は、自民族中心主義 (ethnocentrism) 的なものであると言われ、今日の文化人類学 (社会人類学) では棄却されている。自民族中心主義あるいはヨーロッパ中心主義から脱却しようとした人類学者はレヴィ＝ブリュルが初めてではなく、その皮切りとなったのは、20世紀当初、個々の文化を異なる価値を持つものと見做して客観的な視座からそれらを相対させる文化相対主義 (cultural relativism) と呼ばれるものを提唱したフランツ・ボアズ (Franz Boas) であった。今なお文化人類学の基本的な考え方となっているボアズ以降の文化相対主義では、個々の文化を独自のものとして理解するために、現地に赴いてその特定の共同体の中に入り込んで行う長期的なフィールドワークに基づく記述的な民族誌の作成が不可欠とされた。その方向性をさらに固めたのは、同じくよく知られているように、フィールドワークによる史上初の包括的な民族誌を作ったラドクリフ＝ブラウン (Alfred Reginald Radcliff-Brown) とマリノフスキー (Bronislaw Kasper Malinowski) であり<sup>5</sup>、この二人は文化相対主義的な態度を個々の文化 (それぞれアンダマン諸島民とトロブリアド諸島民のそれである) の研究で初めて十全に実践した研究者と言っても過言ではない。それに対し、レヴィ＝ブリュルの画期的たるゆえんは、それを通文化的 (cross-cultural) な研究で実践した点にある。即ち、(宣教師や探検家などを含む) フィールドワーカーたちによる報告に基づきながら、多くの未開社会の諸事実を比較してその類似点を捉えその根源を追究し、そうした未開的なものを西洋的なものと対照させることを、予

3 cf. Gardner (1985: 223); cf. 岡庭 (2006: 68).

4 今日では「原始社会」や「未開社会」の代わりに「無文字社会」と言う傾向がある。

5 それぞれ、Radcliff-Brown(1922)とMalinowski(1922)であり、共に『原始心性』の初版と同じ年に出ている。

め何かを絶対的な中心として据えてではなく、客観的な見地に立って行なったのである。そのようにして彼は、自らフィールドワークをすることは遂に叶わなかったものの、論理的心性と原始心性という大枠の類型論を打ち立てることに成功したのである。

レヴィ＝ブリュルの理論の中では原始心性と論理的心性の対比が、原始人と文明人の対比、未開社会と文明社会の対比とそのまま結びついているもののように思われるが、彼はのちに、原始心性の心的構造は、社会ごとに顕著であるかそうでないかの差はあっても、論理的心性が特徴的な社会を含む、どの社会においてもある程度存在するものであることを認めている (Lévy-Bruhl 1998)<sup>6</sup>。しかしその事実があっても、結果として社会の類型と人間の類型よりもはっきり、心性の(あるいは心的構造の)類型を建てた成果が残ることに変わりはなく<sup>7</sup>、彼の仕事の価値を減ずるものではないと思われる。

今回の翻訳の試みについては、まだ改善を重ねる余地は当然あるだろうが、少しでも甲斐あるものであることを願う所である。

## 凡例

1. 題目のように、「原始」(primitif) という要素を含んだ表現を特定の民族たちに対して用いることについて、レヴィ＝ブリュルは方々において例えば次のように断っている: 「原始人という用語は適切ではないが使わないわけには行かない。この語を我々は我々の知っている極度に単純な社会の成員を指すだけの意味に用いているだけである (『思惟』(山田訳), p. 16)」。よって、原典に忠実な訳にするためにも、日本語題は『原始心性』としておくことにした。
2. 研究の性質上、異なる民族たちの事例に言及しているため、引用が多く含まれる。引用元が英語である場合には、著者によるフランス語訳からではなく、引用元文献の英語から日本語訳を行った。引用元がフランス語と英語以外の言語(ドイツ語)である場合は、著者によるフランス語訳をそのまま日本語訳した。
3. その他、付け加えることは以下の通りである。
  - ・訳註には [訳註] と示した。
  - ・[訳註] と示していない註釈は原註である。

6 同じく『思惟』「日本版序」(山田 1953: 5-7) も参照。

7 例えば、レヴィ＝ブリュルの原始心性探究の成果に対してユングが心理学からアプローチにしたことについて Segal(2007) が論じている。

- ・一部、文脈などを分かりやすくするために補って訳した部分には、[訳補]と示した。
- ・いちいちそのような印を付けていないが、原註において、一部の参考文献の副題あるいは発行年を補った。
- ・原文の本文でイタリックになっている所は<>で囲った。

### 参考文献

- 岡庭 義行 . 2006. 「私たちはインコ [Araras] である : レヴィ = ブリュル再考」『帯広大谷短期大学紀要』 43: 67-78.
- Gardner, H. 1985. *The mind's new science: a history of the cognitive revolution*, Basic Books, Inc., Publishers: New York.
- Lévy-Bruhl, L. 1910. *Les fonctions mentales dans les sociétés inférieures*, Félix Alcan: Paris; (日本語訳) 山田 吉彦 . 1953. 『未開社会の思惟』 [岩波文庫], 岩波書店: 東京 .
- Lévy-Bruhl, L. 1998. *Carnets: présentation de Bruno Karsenti, préface de Maurice Leenhardt*, Quadridge, Presses Universitaires de France: Paris.
- Malinowski, B. K. 1922. *Argonauts of the Western Pacific: an account of native enterprise and adventure in the archipelagoes of Melanesian New Guinea*, Routledge & Kegan Paul Ltd: London.
- Radcliff-Brown, A. R. 1922. *The Andaman Islanders: a study in social anthropology* [Anthony Wilkin studentship research 1906], Cambridge at the University Press: Cambridge.
- Segal, Robert A. 2007. "Jung and Lévy-Bruhl" *Journal of Analytical Psychology* 52(5): 635-58; discussion 659-65, 667-71.

## 目次

『原始心性』は以下のように、「序」と「緒論」および十四の章から成る。節題の翻訳は割愛した。

序

緒論

第一章 原始心性の二次的原因への無関心

第二章 神秘的で目に見えない力

第三章 夢

第四章 予兆

第五章 予兆(続き)

第六章 ト占

第七章 ト占(続き)

第八章 神明裁判

第九章 事故と不幸に対する神秘的な解釈

第十章 成功の原因に対する神秘的な解釈

第十一章 白人の出現に対する、白人が持ち込んだものに対する、神秘的な解釈

第十二章 未開社会における新しいもの嫌い

第十三章 原始人とヨーロッパの医者

第十四章 結論

## 序

12年前、『未開社会の思惟』が出された時、その本の時点で『原始心性』という題がふさわしかっただろう。しかし、「心性」(mentalité)という表現、そして「原始」(primitive)という表現すら、今日のように日常の言葉にはまだなっていなかったため、その題を付けるのをやめたのである。それを改めて本作で採用する。本作が前作の続きであることを示すのにこれで事足りる。大分異なった視点からではあるものの、両作とも同じ主題を扱うものである。『思惟』では、同一性原理との関係の中で考察される融即律について、そして、原始人の魂が矛盾に対して甚だ無頓着であるという事実について、ことさらに強調して論じた。『原始心性』はむしろ、原始人にとっての因果、ならびに因果について彼らの内で行われる考えがもたらす結果を示すことに目的を置く。

本作は、そのあらゆる側面を顧みて、その多様な現れ方について、『思惟』以上の徹底した考察を原始心性に対して行なっていこうというのではない。今回もまた、概括的な導入に過ぎないのである。私はただ、可能な限り正確なやり方で、原始心性の持つ独自の方位づけ、原始心性がどのような材料を使えて、それらをどのように入手し、どのような使い方をするのか：一言で言うなら原始心性が経験することの範囲と内容、を決定づけることに努めただけである。そうすることで私は、原始人に特徴のないいくつかの心的習慣を抜き出して記述すること、ならびに、何故そして如何に彼らの心的習慣が我々のものと異なるのかを示すことを試みることになった。

原始心性のいわば本質的な手続きを捉えるために、私は敢えて、それらを分析するに当たって最も単純で最も曖昧性のない事実たちを選んだ。複雑な題材にあっては夥しくなる誤謬の可能性を少なくできることと、原始心性の構成要素となる原理をそれらの作用自体の中により鮮明な姿で導き出せることを、この方法を以てして期待することができた。そのようにして、全ての部分即ち、夢、彼らが気づいたり引き起こしたりする予兆、神明裁判、「悪い死」、白人によって持ち込まれた珍奇な物品、白人の薬など、そういったものたちに宿る、彼らを取り囲まれていると感じる、原始人にとっての見えない力たるものを研究するのに執心した。

従って、ここでお見せしようというものは、未開社会の技術(道具や武器の創作・改良、家畜の飼育、建物の建築、土地の耕作など)あるいは、家族組織、トーテムズムといった、時として非常な複雑性を呈する彼らの社会体制との関係に基づいて行われる原始心性の研究、といったものではない。

もし、本書が織り成す概括的導入が、先の書と結びついてその目的を達成するなら

ば、原始人たちの社会体制、技術、芸術、言語によって引き起こされる大きな問題のいくつかに対してより良い定義がはっきりと与えられるだろう。彼らの、我々のとは区別される、心的習慣を知ることは、解答の糸口を絶やさせない言葉遣いで疑問点を挙げていくことを助けるだろう。ある種の導きの糸を供してくれるのである。少なくともいくつかの場合においては、原始人が多かれ少なかれ意識的に追求している目的たちを見極めることの難しさを減じてくれるだろう。時として我々の目には子供じみてあるいは愚かに映る、彼らが当たり前のように用いる手段をより良く理解することとなり、従って、彼らの行う、個人的なものにせよ社会的なものにせよ、活動の、普段の形に対する説明となる深い理由へと迫っていくこととなるだろう。本作の多くの章は、この方法を比較的単純な諸々の事例に適用する試みである。

私にはその結果が、『思惟』の中で見せられた抽象的な分析を立証するものと思われる。現に、その分析に基づいて私は、これまでに説明されることのなかったあるいは恣意的とは言わないまでも尤もらしいの域を出ない仮説<sup>1</sup>によって解釈されていた事実のいくつかを説明することができた。二つの著作は従って、相互に補い合うのである。両者とも、我々が大変不適切に原始人と呼ぶ我々から非常に遠く同時に非常に近くもある人々の思考様式と行動原理の中に入り込むために行われた、同じ努力によって生まれたのである<sup>2</sup>。

1921年9月。

---

1 『思惟』「緒論」で明示的に行っているように、エドワード・タイラー (Edward Burnett Tylor) とジェームズ・フレーザー (James George Fraser) に代表される当時のイギリス人類学派の欠点を批判しているものと思われる。[訳註]

2 この本のいくつかの部分は、1919年11-12月に、ボストンのローウェル・インスティテュート (Lowell Institute) で行われた講義で扱われたものである。



## 緒論

## I

未開社会の心性を我々の心性から分け隔てる数々の差異のうち、最も好都合な条件で、即ち白人との長きに渡る接触による改変が起こる以前にその差異たちを観察した、多数の人たちの関心を射止めたものがある。彼らは原始人たちの中に、理性に対する、論理学者たちが思考の論証操作と呼ぶものに対する、一貫した忌諱を確認したのである。彼らは同時に、その忌諱は根本的な無能力に起因するでも知力の生来的な欠如に起因するでもなく、彼らの思考の習慣の集合体によって説明できるということを指摘した。

例えば、北アメリカ東部のインディアンを初めて目にしたイエズス会の神父たちは、このように思うことを避けることができない：「イロコイ族<sup>1</sup>は、中国人や信仰と神の真理の証明が通用する他の文明化された人々のように推論をすることができないのだと考えざるを得ない。…イロコイ族を動かすものに理性といったものは微塵もない。物があることを知覚さえすれば、それがそのまま導きの光となるのである。神学が最も頑なな人たちを説き伏せるために毎度の如く頼みにしてきた信仰根拠もここでは馬の耳に念仏で、我々が最も偉大なる真理が虚言呼ばわりされる始末である。平生において彼らは、見たものしか信じないのだ<sup>2</sup>。」同じ神父は、さらに長く付け加えている：「福音書の数々の真理は、もしそれらが理性あるいは良識を唯一の基盤にしていたならば、彼らには納得に足るものと思ってもらうことはできなかったであろう。彼らには教養と礼儀が欠けているため、彼らの魂に訴えかけるためには、もっと粗雑でもっと手触りのあるものが必要であった。彼らの中にもヨーロッパ人の知性に匹敵する程度の科学的能力を備えた知性の持ち主たちが存在することもまた事実である。しかしながら、彼らによるいかなる推論も、彼らの身体の健康の中にそして狩猟、漁、交易、争いにおける喜ばしい成功の中にあるもの（これらの全てのものは彼らが、家屋、生業、生活様式に加えて迷信と神性にまでも関連したあらゆる結論を引き出すさすがにする諸原理として存在するのである）を上回ることが到底起こりそうもないこのような状態にまで、彼らの行う驥と、生活を乗り切っていく必要性が彼らを追いやったのである。」

この一節をそれに先行する一節と引き合わせることで、我々が問題にしている論点

1 「イロコイ族」は一部のインディアン諸民族の総称である。[訳註]

2 *Relations des jésuites* (éd. Thwaites), t. LVII (1672-3), p. 126.



に関して、イロコイ族の心性に対する十分に的確な記述の断片を得ることができる。そのような「野蛮人」と彼らより文明化された異教徒との本質的な違いの起源となる前者に固有な知能的劣等といったものは存在しない。事実が起源となるのであり、その事実を説明するものは、神父たちによれば、彼らの社会状態と彼らの道徳の中に見出すことができる。同様に、クランツ宣教師はグリーンランド人に関してこう言っている：「彼らの内省あるいは発案は、彼らの生計のために必要な仕事の中で展開するのであり、その仕事に分離不可能に結びつけられているものでない限り、彼らの思考の気を引くことは少しもない。従って、愚かさの含まれていない単純性、推論をする技法を欠いた良識を彼らの中に認めることができる<sup>3</sup>。」こう理解しよう：ほんの僅かでも抽象性のある推論を辿る技法を欠いた。というのは、グリーンランド人が、その生計に必要な仕事を追っていく中で、自らの追求する目的に対して推論したり複雑なものを含む手段を利用したりしていることは、疑いないことなのである。しかし、そうした知的な作業はそれらを想起させる物体から切り離されることがないのであり、目的が達成されればその瞬間に止むものなのである。そうした知的な作業はそれ自体の目的でなされることは決してなく、それ故に、我々がまさしく「思考」と呼ぶものの尊厳に達するようには我々には思えないものである。これは、極地のエスキモーたちと生活を共にした現時代の観察者が光を当てる点である。「彼らの考えることは、」彼は言う。「鯨の漁、狩猟、食べ物を巡ることがらが全てである。それを別にしては、彼らにとっての思考とは概ね憂鬱か悲しみと同義のものなのである。『何を考えているのですか？』ある日私は狩りの途中に物思いに耽っている様子の一人のエスキモーに聞いた。その質問に彼は笑った。『やっぱりあなた方白人は本当に多くのことを考えます。我々エスキモーは、肉の蓄えのことしか考えません。冬の長い夜を乗り切るのに十分な肉があるのか。肉の量が充分ならば、もう考えることはありません。私の肉は余るほどありますよ！』私が彼を『思考』していると思ったのが彼の気に障ったと、私は理解する<sup>4</sup>。」

アフリカ南部の原住民を研究した最初の観察者たちは、上の考察たちと実によく類似した考察を許す。ここでもまた、「彼らは見たものしか信じない」ということが宣教師たちによって確認されているのだ。—「下層民たちによる笑いと拍手が湧き起こる中で：『白人たちの神は、』異教徒の対話者が言うのをお聞き願えるだろうか。

3 D. Crantz. *Historie von Grönland* (1765) [訳補]; John Gambold [訳補] による英語訳 *The history of Greenland: including an account of the mission carried on by the united brethren in that country*, I (1767), p. 135.

4 Kn Rasmussen. *Neue Menschen: ein Jahr bei den Nachbarn des Nordpols* (1907), pp. 140–141.

『我々の目に見えるのですか。——それで<モリモ>(神)があくまで見えないものならば、理性的な人間がどうやってそんな隠されたものを崇拜できるものなのでしょう。』<sup>5</sup>」—ソト族の所でも同じである。「本当に神がいるのか、私としてはまず空を昇って確かめてみたいです。」貧しいソト族の男は毅然として言った。「神を確かめられたなら、信じますよ<sup>6</sup>。」もう一人の宣教師は、「この人々(ツワナ族)の中に概して認めることができる、真剣さの無さと内省の欠如」を特筆し、「これらの人々にあっては、思考は死んでいるも同然、もしくは、少なくとも、地上まで登って来ることがほぼ不可能に等しい……自らの腹の中に神を持つ粗野な人々にあっては<sup>7</sup>。」とする。バーチェルは、ブッシュマンに関して同様のことを書いている：「ヨーロッパの教育によって開化された頭脳を持っている人々が、身体的な知識および精神的な知識において最も単純な考えあるいは最も無垢な概念であることがらを超越するあらゆるものに対して野蛮人が持っている<愚かさ>と呼ばれるであろうものを想像することは至難の業である。しかし、事実はこのようである：彼らの生活で起こる事変があまりにも少なく、彼らの生業、思考、世話が及ぶ範囲にある事物があまりにも寡少であるため、必然的に、彼らの行う考えもまた、僅少でかつ限定されたものになるのだ。まだせいぜい十単語と少ししか教えてもらっていないのにマチュンカの作業を中断させてやらざるを得なかったことが何度かある。頭を酷使し、または<思考能力>(faculty of thinking)を途切れなく働かせたことで、彼の内省する力が忽ちのうちに枯渇し、その時の話題に気を向かわせ続けることが本当にできなくなったことがそれくらい明白だったのだ。そうした際には、彼の大義そうな感じと放心した様子から、最も平易な種類の抽象的な質問が忽ちのうちに彼の知性の力を吸い尽くし、彼を理性がまだ眠ったままである子供の状態へと追いやってしまったことが一目瞭然だった。それから彼は、頭が痛くなるとこぼしたものだ<sup>8</sup>。」しかし、この同じ旅行者は他の箇所でも、このブッシュマンたちについてこう言う：「彼らの特徴として鈍感さや愚かさといったものは欠片もなかった。ところがむしろ十分な鋭さがあり、彼らによる観察と理解の届く範囲で彼らの独自の生活様式によって設定される主題に関しては、如才な

5 *Missions évangéliques*, XXIII (1848), p. 82. (Schrumpf.)

6 *Ibid.*, XIV (1839), p. 57. (Arbousset.)

7 *Ibid.*, XXVII (1852), p. 250. (Frédoux.)

8 W. J. Burchell. *Travels into the interior of Southern Africa*, II (1798), p. 295. —同様に、「我々が彼の言語について質問を始めると、程なくして彼は自制を失い、頭が痛くなると訴え、そのような努力を続けるのは彼には無理であることを分からせた。」Spix und Martius. *Reise in Brasilien*, I (1854), p. 384.

さと賢さを見せることはしばしばであった<sup>9</sup>。」

アフリカ南部の人々の場合も、従って、イロコイ族の場合と同様、思考の論証操作に対する忌諱は、先天的な無能力にではなく、彼らの精神活動の形と対象を支配する習慣の集合体に起因するものなのである。アフリカ南部で長い年月を過ごし、先住民の言語を流暢に話した宣教師のモファットは、ホッテントットについて同じことを我々に言う：「彼らのうちの賢明な方の人々でさえ、こちらの国では小さな子供たちにもよく解される主題に関して、その際限を適切な方法によって想像することがとてつもなく難しい無知を持っている。それでもなお、大まかな見かけにもかかわらず、彼らが穎敏な推論家であり、人間と作法の観察者であるということを、否定することはできない<sup>10</sup>。」

もう一人の宣教師はこの同じホッテントットについて言う：「ヨーロッパの我々の仲間たちはきっと、思考すること、理解すること、記憶に留めておくことにまつわるこれらの人々の魂の愚鈍さから我々が引き出せるであろう数々の例を、信じ難いものと思うことであろう。彼らを長いこと知っている私自身さえ、彼らが最も単純な真理たちを把握するのにそして何より自力で推論をするのにどれだけの途方もない困難があるかをまた自分の理解したことをどれだけの早さで忘れてしまうかを目の当たりにする時、驚きを隠さずにはいられない<sup>11</sup>。」

彼らに欠如しているのは、彼らの感覚の下に落ちるものより他の対象に自らの魂を日常的に適応させること、あるいは、直ちに使用が必要であると彼らが認識するものより他の目的を追求することである。「キャンベル氏は、『アフリカーナ的生活』に関する小さな概説の中で、こう述べている：『彼は、キリスト教の教育の恵沢を受ける前には神に対してどんな考えを持っていたのかと聞かれた時、当時はそうした主題に関してはどんな考えも持っておらず、自分の家畜のこと以外に考えることは何もなかった、と答えた<sup>12</sup>。』<sup>13</sup>」モファット氏は、大変聡明な現地の恐るべき首領であったアフリカーナの口からこれと同じ白状を採取している。

ヨーロッパ人と関わるようになり、ヨーロッパ人のために新しい抽象化への努力をその中で余儀なくされていくことで、これらのアフリカ南部の先住民たちが本能的に、労力を最小限まで削減しようと模索したことは自然なことである。どんな時も、

9 *Ibid.*, p. 55.

10 R. Moffat. *Missionary labours and scenes in Southern Africa* (1842), p. 237.

11 *Berichte der rheinischen Missionsgesellschaft* (1865), p. 363.

12 J. Campbell. *The life of Africamer: a Namacqua chief, of South Africa* (1827). [訳註]

13 R. Moffat. *Ibid.*, p. 124.

彼らの優れた記憶力が内省と推論の必要性を取り払うことができる場合は、彼らはそれを利用せずにはいない。有益な例がある：「宣教師のネゼルが、ウプングワネに言う：『先週日曜日に説教を聞きましたね。私に覚えていることを話してください。』ウプングワネは、始めはカフィル人が決まって見せるためらいを見せたが、やがて主たる内容を一語一語再現した。数週間後、宣教師は説教の最中に彼を観察したが、見た感じではいかにも注意を払っていない様子で、木片を切ることに専念していた。説教の後、宣教師は彼に聞いた：『今日は何を覚えましたか。』すると異教徒は、木片を引き寄せ、切り込みに寄り添いながら、内容を一つ一つ再現した<sup>14</sup>。」

記憶を推論の代わりとするこのような傾向は、見られる場合には必ず、親たちの心的習慣に自然に倣って形成された心的習慣を持つ、子供たちにおいてすでに顕現している。先住民の子供たちは、宣教師たちが学校を存続させることに成功している全ての場所で、少なくとも発達がより緩やかになりながら停止を迎える一定の年齢に達するまでは、我々の諸国の子供たちと同じ程度に速くかつ良く学習するということが知られている。牧師のジュノーは、アフリカ南部のトンガ族の地で次の考察をしている：「生徒たちは記憶力が試される問題でもっと出来が良い。彼らは何故、約分の複雑な計算が伴うイギリス式の度量衡を学んでいる時の方が、いかにもより単純でより合理的に見えるメートル法に対する時よりも遥かに悠々としているのかが、それによって説明される。イギリス式の度量衡は、ヤード、フィート、インチ、ガロン、ポイント、ジル、ポンド、オンス、グレインなどといった様々な単位どうしの関係を水も漏らさぬ正確さで記憶に保っておくことが必要とされるが、一度マスターしてしまえば、作業は純粹に機械的なものとなる。これが先住民たちの好むものであり、一つだけの前提が全体を動かす、最少限の推論がないと使えないメートル法とは対照を成すものである。まさしくその最少限の推論の必要性というのが、先住民の生徒たちの間でメートル法が不人気なことの説明となるのである。問題を出されて、足し算をすればいいのか引き算をすればいいのかを教えられずにそれを解かなければならない場合、彼らの感じる難しさはうんと膨れ上がる。従って算数は、記憶が管轄できる問題である場合には、易しくて楽しい勉強であると思ってもらえる。推論をしなければならない場合に、苦痛の作業となるのである<sup>15</sup>。」実によく類似した考察が、バロツェ族の所でもなされた。「我らがザンベジの仲間たちを夢中にさせるのは、ソト族とその他アフリカ南部の大体の民族たちの場合と同じく、算数である。彼らは数字以上の

14 Dr. Wangemann. *Die Berliner Mission im Zululande* (1875), p. 272.

15 H. A. Junod. *The life of a South African tribe*, II (1913), p. 152.



ことは何も知らない。算数とは、科学の中の科学であり、議論の余地なく良き教育の指標である。イギリス式の古いがそれだけ高貴でもある方法を用いる度量衡の算術の迷路をご存じだろうか。彼らはそれに目がないのだ。彼らにリーヴル、ファージング、ペニー、オンス、ドラクマなどの話をすれば、彼らの目は輝き出し、顔色は明るくなり、瞬く間に計算が完了する。計算と言えるものかは別としても…。最も確実的な科学が感心するほどに機械的なものへと化することができるというのは、奇妙なことである。だが、より単純ではありながら少しの推論が必要となる問題を出せば忽ち袋小路に陥ってしまうのが彼らである。『お手上げだ。』と口にする彼らには、いかなる知的な努力もする気はないのである。私が指摘するこのことは、少しもザンベジ人に特有のものではない<sup>16</sup>。」—「ナマ族の所では、子供たちは機械的なものとして習得することができて思考も内省も必要がないあらゆるものにかけては達人の才を発揮するのだが、こと計算となると、なにか理解というものをしてもらうことがとてつもなく難しい<sup>17</sup>。」—同様に、ニジェルにおいて、「モシ族はものごとの理由を探求する術を知らない。我々の所の小さな子供たちは推論家であり、時として質問によって我々を困らせるが、モシ族は疑問というものを持つことがない：如何にしてこれはこうなっているのか、何故これはこのようになっていて、違うようにはなっていないのか、といった。彼らには、最初に持った解答だけで充分なのだ。この内省の欠如が彼らの文明化の遅れの原因である…。そこからさらに考えの欠如となる。会話と言えはほぼ女性と食べ物、雨季にはそれと作物、のことしか話題にならない。彼らは考えの枠が甚だしく制限されているのだが、それは大きくなりうる可能性を秘めている。というのは、モシ族を知的であると考えることは可能なのだ<sup>18</sup>。」

以上のアフリカの諸社会に関することがらを締めくくるため、優れた観察者であり、自らの経験を次の言葉で要約できると考えた宣教師 W.H. ベントレー自身の表現に倣うことにしよう：「アフリカ人は、ニグロイドだろうがバントゥー系だろうが<sup>19</sup>、しなくて済むならば思考も内省も推論もしない。彼らは記憶力が並外れている。観察と模倣に大いに長けており、言葉を自由自在に操り、豊かな人徳を持つ。親切さも、

16 *Missions évangéliques*, LXXVI, 1 (1901), pp. 402–403; cf. *Ibid.*, LXXVII (1897), p. 346. (Béguin.)

17 *Berichte der rheinischen Missionsgesellschaft* (1880), p. 230. (Missionär Schröder: *Reise nach dem Ngami-See.*)

18 P. Eugène Mangin, P. B. «Les Mossi: essai sur les us et coutumes du peuple Mossi au Soudan Occidental» *Anthropos*, X-XI (1915–1916), p. 325.

19 バントゥー系もニグロイドに含まれる。[訳註]

寛大さも、愛情深さも、利他性も、忠実さも、誠実さも、勇敢さも、忍耐強さも、甲斐性も、アフリカ人にはある。しかし、推論と発案の能力は依然として眠ったままである。彼らはその時々を起こっている状況を容易く把握しかつそれに順応し請け負うということをするが、入念に計画を練り上げることや鮮やかに結論を導き出すこととなると、彼らの域を超えてしまう<sup>20</sup>。」

この内省する能力の欠如を具体的な例によって説明することはおそらく無益なことではないだろう。ベントレー自身からそれを借りよう：「この読み書きを習いたいという激しい願望の理由を突き止めるのに我々は多大な時間を要した。先住民たちは、商品を売ろうと海岸に持って来る時、それらを製造所の買い取り市場まで運び入れるのだった。商品の重さと長さが測られると、そこの仲買人が紙の欠片に少し書き入れをする。それから先住民らはこの『書物』を取引市場担当の仲買人の所まで持って行き、この仲買人の方が対価を渡すのであった。サン・サルヴァドール<sup>21</sup>の多くの人々は考え合わせた果て、もし文字を書くことができれば商品をわざわざ製造所へ運ぶ労を取る必要がないだろうという結論に至った。紙の欠片に少し書き入れをすればいいのである。『物神』—製造所の取引市場はみなそう呼ばれている—の所でその紙を見せれば、欲しい物は全て手に入るのだ。こうして、読み書きを学びたいという熱望がサン・サルヴァドールにおいて起こったのである。そこには、盗みの意図は全くなかった。アフリカ人はしなくて済むなら何かに対して突き詰めて考えるということをしなない。これは彼らの弱点であり、特徴である。彼らは、自分たち自身の間で行う取引と海岸の製造所の類似性を認識することがなかった。彼らは、白人は織物が入り用の時には梱を開ければそれが入っている、と考えた。梱がどこから、なぜ、どのようにして、来ているのか—彼らは考えることはなかった。分かるべうもない。どの先住民も、その織物は海の下にいる死んだ人たちによって作られたのだと言った。全てのものが超常的なもの、呪術的なものとあまりにも絶望的に混和されているため、彼らの考えは目に見えるものと同じ遠さの所にまでしか行かないのだった。書き入れをされた紙を見せれば、一音節の言葉も発されることなく、織物が手に入ったのだ。それで彼らは『我々もあのような紙を拵える方法を学ぼう。』と言ったのである<sup>22</sup>。」

つい最近、ウォラストン氏はニュー・ギニアにおける同様の単純な反応について言及した。「始める前に、ナイフや斧のような、労働の見返りで貰うことになるものが

20 Rev. W. H. Bentley. *Pioneering on the Congo*, I (1900), p. 256.

21 ここで言う「サン・サルヴァドール」とは、現・アンゴラ北西部の都市ンバンザ＝コンゴのことである。[訳註]

22 *Ibid.*, pp. 159–60.



彼らに見せられた。そして彼らは、[パリマウからワタイクワの野営地まで荷物を移し [訳補]] 終わると、[ワタイクワの野営地で我々から受け取った [訳補]] 紙片を持って、往きでは三日かかった距離を疾走し、二、三時間でパリマウに戻った。村の精力的でない方の何人かは、仲間が紙片をパリマウの野営地の担当者に見せただけでナイフや斧を与えてもらうのを見て、ひょっとしたら自分たちも同じ褒美を簡単に手に入れられるかも知れないと思ったものの、彼らが差し出す小さな紙切れでは手痛くすげない拒絶以外には何ももたらされないことが分かってひどく驚くのであった。しかし、その不正があまりにも子供じみたものであったため、誰も真剣に怒る気にはなれなかった<sup>23</sup>。」

そこには悪意は一切なかった。ウォラストン氏よりも経験が豊富であったベントリー氏は、それをはっきり理解し、よく説明した。それは、原始人を、「物を知覚した時点で止まらせ、それをどうにか避けられないかを推論しないようにさせる」心的習慣の沢山の現れ方のうちの、他の多くのものより際立っている、一つである。

南アメリカやオーストラリアなどにおける他の未開社会から採集される、同じ種類の観察をいくらかでも簡単に引用することができるだろう。「メラネシア人の考えの列の中に立ってみることは、」パーキンソン氏が言う。「容易なことではない。彼らは、知性の面で、極めて低級である。論理的思考は彼らには、ほとんど全ての場合において、成し得ないものである。自らの感覚上の知覚によって直に把握されないものは魔術または呪術的作用であり、考え続けても全く無駄なことなのである<sup>24</sup>。」

まとめると、抽象的な思考と本当の意味での推論を除外する心的習慣の集合体は、多数の未開社会において見出され、原始人たちの心性の特徴的で本質的な特性を構成しているものであると思われる。

## II

思考の論証操作や推論、内省は我々の目には自然でほぼ恒常的な人間精神上の営みとして映るのに、原始心性はそれらに対して、そのような忌諱とすら言えそうなほどの無関心を示すのはどういうわけであろうか。

23 A. F. R. Wollaston. *Pygmies and Papuans: the stone age to-day in Dutch New Guinea* (1912), p. 164; cf. C. G. Rawling, *The land of the New-Guinea Pygmies: an account of the story of a pioneer Journey of exploration into the heart of the New Guinea* (1913), pp. 166-67.

24 R. Parkinson. *Dreissig Jahre in der Südsee: Land und Leute, Sitten und Gebräuche im Bismarckarchipel und auf den deutschen Salomoinselfn* (1907), p. 567.

それは無能力や非力といったものではない。このことは、原始心性の当該の傾向のことを我々に教える人々自身が、そこにおいても「ヨーロッパ人の知性に匹敵する程度の科学的能力を備えた知性の持ち主たち」を見つけることができるときっぱり付言していることと、オーストラリアやメラネシアなどの子供たちが宣教師の教えることをフランスやイギリスの子供たちと変わらない容易さで学習するという事実から分かる。また、深層的な知性の麻痺、無気力、手の施しようがない眠りの状態、によるものでもない。というのも、ほんの少しの抽象的な思考ですら耐え難い努力に感じ、推論をしようと思うことなど到底ありそうもないこの同じ原始人たちは、対象が彼らの興味を引くものである時には、とりわけ彼らが熱烈に望む目的の達成に関わるものである時ともなると瞬く間もなしに、その明敏さ、賢明さ、巧妙さ、小器用さ、そして精緻さまでをも、今度は顕わにするのだ<sup>25</sup>。

さきほど彼らの「愚かさ」について言及していたのと同じ観察者は、彼らの独創性と審美眼に息を呑むであろう。従って、「愚かさ」という語を字義通りに捉えてはいけけない。むしろすべきことは、彼らの見かけ上の愚かさはどこから来るのか、それらを決定づける条件は何であるのか、を問うことである。

一つの説明が、上で見たように、原始人たちの最も単純な論理操作に対する忌諱を確認した宣教師たちによって提唱された。その説明は、彼らによって観察された原始人たちは自分たちの生計、家畜、猟の獲物、魚、などのために必要な限られた数の対象以外のことについては全く考えないし考えたがることもないという事実から引き出されたものである。原始人たちによってそのような制限された心的習慣は、そこから外れる全ての対象とりわけ抽象的なものが彼らの魂を引きつけることができなくなるまでに、強いものなのであろう。「彼らは見たものしか信じないのだ。彼らは考えを感覚よりも遠くへ行かせることがない。直に知覚されない全てのものは思考の対象外である。」などとなるわけである。

しかし、問題はそれでは解決しない。もし報告された数々の観察が正しいのなら—正しいように思われるが—むしろ事態は複雑になる。第一に、物質的な興味だけを追求することが、そして日常的に思考の対象となる事物の少ないことまでもが、内省する能力の欠如と推論への忌諱という結果を決まってもたらずというのはどういう理由

---

25 「視界が捉えたものから素早く結論を導き出すことにかけては、ニュー・ギニアの人間をどんな時にも当てにすることができる。彼らの関心の対象になるもので彼らの目を逃れるものはほぼ皆無に等しい。…彼らの知識の有り方は時として異様に思える。」 H. Newton. *In far New-Guinea: a stirring record of work and observation amongst the people of New Guinea* (1914), p. 202.

に拠っているのかが不明である。逆に、そのような特化行為、即ち精神と注意の力をそれ以外の事物を除外した限られた数の事物へと集中させることは、それらの事物を追求することへの、身体的であるのと同じくらいに知的でもある、正確で厳密な適応という結果をもたらすはずである。そしてその適応は、知的な行為として、創意性、内省、そして追い求める目的を達成する最も適切な手段に適合する器用さの、一定の発達を暗示するのである。これは実際、よく起こることである。

この適応が、原始人たちの、興味の対象となる事物との間に目に見える繋がりを持たない事物に対する不屈に近い無関心を伴うことによって、宣教師たちは幾度となく辛酸をなめることになった。しかし、福音書の教えを理解する能力のなさ、そして、それに耳を傾けることへの拒絶さえも、それだけでは論理操作に対する忌諱の十分な証拠となるに至らない。同じ人物が、対象が気になるものである時や自分の家畜や妻に関するものである時には顕著な積極性を見せることが確認される場合にはなおさらに。

さらに、その同じ宣教師たちが、原始人たちほどに勇猛果敢な信仰者はいないことをもまた他方では我々に示しているのに、この忌諱を、関心を持つ感覚の対象を限定する行為によって説明することは、軽率であるとは言えないだろうか。目に見えないながら実在している存在や作用は無数にあるという前提を原始人たちの精神から奪い取ることはできない。リヴィングストンは、アフリカ南部の黒人たちが持っている見たことのない存在に対する絶対的な信仰心に感服することがたびたびあったと言う。観察が十分に忍耐強くまた粘り強くなされた至る所で、神聖なものに関しての原始人たちの著しいためらいに観察がとうとう打ち勝った至る所で、力、精神、靈魂、〈マナ〉など、感覚が接近することができないものたちに関わる集団表象<sup>26</sup>の、無限に広がると言ってもいい領域を彼らが持っていることが観察によって明らかになった。そして非常に多くの場合、この信仰心は、宗教の実践に従事する特別な日と場所が決まっている多くの信心深いヨーロッパ人たちが持つような断続性を如何ほども持っていない。こちら側の世界と向こう側の世界、感知することができる現実と向こう側のものを、原始人は区別しないのだ。本当に彼らは、目に見えない精霊たち、触れることができない力たちと、共に暮らしているのだ。そのような現実は彼らにとっては紛うことなき現実である。その信仰心は、彼らの成すことのうちで最も取るに足らないこ

26 エミール・デュルケム (Émile Durkheim) に遡る「集団表象」は、「与えられた社会集団の成員に共通で、その社会内で世代から世代へ伝えられ、個々の成員を拘束し、それぞれの場合に依じて対象に尊厳、畏怖、崇拜の感銘を成員に呼び起す。」と定義される (『思惟』(山田訳), p. 15)。[訳註]

との中においても、最も重要なことの中におけるのと同じように表出する。彼らの生の全て、彼らの行いの全てが、それで満ちているのである。

原始心性がそのようにして、論理操作を避け、その経験を持たないとしても、そして推論と内省をすることはばかるとしても、それは、感覚によってもたらされるものを飛び越える力がないことによるのでも、全て物質的である少数の対象に関心を限定させる行為によるのでもない。原始心性のこの特性について言い立てる証人たち自身が、そのような説明を棄却することを許し、延いては、余儀なくしている。他を探さなければならない。成功の可能性をなんらか伴う探し方をするためにはまず、体系的な解決法を可能にする言葉遣いによって問題を提示しなければならない。

我々が研究対象にしている原始人たちの立場になりきり、もし自分たちが彼らであったらどう思考するかという想像に基づいて彼らの思考を決めつけることは、どうあっても尤もらしいの域を出ることのない、ほとんどいつも間違いである仮説にしか行き着くことができない。そうする代わりに、逆に我々自身の心的習慣に侵されないようによく心がけ、彼らの集団表象ならびにこれらの表象間の繋がりを分析することによって原始人たちの心的習慣を明らかにすることに勤しむことにしよう。

彼らの魂が我々の魂と同じように方位づけられていて、受け取る印象に対して我々の魂と同じ反応を彼らの魂もまた見せるのだと想定する<sup>27</sup>なら、与えられた世界における現象と存在物について、我々の魂と同じように彼らの魂もまた内省と推論を行う<はずである>ことをも暗示的に想定することになる。しかし実際にはそのような内省も推論も彼らの魂はしないことが確認されている。この見かけ上の異常な事態を説明するために一定の数の仮説が頼みにされてきた：原始人たちの魂の怠惰ならびに非力、混同すること、子供のような無知、愚かさ、など。しかし、これらは事実たちに対し十分な説明を与えはしない。

その公理を放棄し、先入観を持たずに、未開社会の体制の中にあるいはその体制の由来となる集団表象の中に顕現するような原始心性を客観的に考究することに執心しよう。従って、原始人の心的活動はこれよりは、我々の心的活動の原初の形、子供じみたもの、病気に近いもの、として先立って解釈されることはない。彼らの心的活動は、逆に、それが発揮される数々の条件の下に正常であるように思われ、それ自体のやり方で複雑でありかつ発達を遂げたものであるように思われる。彼らの心的活動を彼らのものではない類型と結びつけるのをやめ、それがどう顕現するか自体を唯一の

---

27 このような想定をかつてイギリス人類学派が行っていたことは、『思惟』「緒論」で論じられている通りである。[訳註]

根拠にしてそのメカニズムを決定づけることで、我々の記述と分析においてそれを変質させてしまうことを防ぐことを期待することができる。